
吉野馨子『屋敷地林と在地の知—バングラデシュ農村の暮らしと女性』（京都：京都大学学術出版会、2013年、407頁、本体3,600円＋税、ISBN978-4-87698-269-1

（評）及川 洋征*

「本書は、バングラデシュ農村の屋敷地及びそこに作り上げられる屋敷地林に注目し、暮らしに必要なものを作り出し維持しようとする営み、日々の暮らしの中から培われてきた生活知、在地の知のありよう、そしてその変容について論じることを目的としている。」（5頁）

評者が本書を一言で紹介するなら、バングラデシュ農村に暮らす女性の活動と屋敷地の植物利用に焦点を当てた民族誌と説明する。本研究は当初「バングラデシュ農業・農村開発研究」〔海田2003〕の一環として始められ、1988年から2008年まで約20年間の農村変容を追いながら「屋敷地林」に焦点を当てた。屋敷地に着目した植物利用・農家経済をテーマとする先行研究はあるが、本書のような多数の図表・写真・スケッチが豊富に掲載された屋敷地専門書を、評者はこれまで見たことがなかった。

この屋敷地林という用語について、著者は「屋敷のすぐ近傍に隣接する園地、林地」またはそれらの複合した空間と説明し、「生活の場であると同時に、人々の日常生活に最も近い生産の場」とも特徴づけている（6、8頁）。こうした空間は、各地で異なる現地語の名称をもち、日本語・英語と

* 東京農工大学大学院農学研究院助教（熱帯農学）

・ 2000、「屋敷林に暮らす—ジャワ島の農家と樹木作物のかかわり」田中耕司（編）『自然と結ぶ—「農」にみる多様性』、昭和堂、168-190頁。

もに用語もまちまちである。今回「屋敷地林」という言い方を用いているが、一般に知られている「屋敷林」としてもよかったと思う。「屋敷」は、建物ではなく屋敷地の意味でしばしば用いられるからである。

以下、先に評者がまとめた紹介文〔及川 2013〕と重複する記述もあるが、まずは本書の全体構成を紹介したい。その後、本書の題名にある「屋敷地林」と「在地の知」について、本書の意義を確認しつつ、評者から読者へ課題を提起したい。

第一部「“人が作った森”から持続社会を考える」は、全 10 章のうち第 1 章と第 2 章からなり、先行研究レビュー、課題・目的・方法、調査地の概要が述べられる。「見えない価値を可視化する」を本書の課題・目的に掲げ（30 頁）、「作物の収量や経済的価値」といった「目に見えやすい換金的な価値のみにとらわれず、人々の暮らしの中に埋め込まれた日常生活における基本的な充足へのニーズを浮き上がらせたい。地域での生活の存立を可能とさせている社会関係も含めた暮らしのあり方をみることにより、言葉にはならない形で存在する暮らしの価値観が浮かび上がってくるのではないかと著者の視点を明らかにしている（31 頁）。「人々の暮らしを“豊か”にする開発のあり方」を見ることをめざしている。

第二部「屋敷地の利用にみる生活知、在地の知の態様」（第 3 章～第 6 章）では、2 つの事例村における屋敷地の構造・住居・植物の配置・家畜の飼養、屋敷地生産物の利用、地縁関係などが詳述されている。この過程で著者は、村人にとっての屋敷地の重要性とともに、さまざまな「生活知」・「在地の知」を見いだしていく。

第三部「屋敷地林と暮らしの変容」（第 7 章～第 9 章）では、第二部の事例村における追跡調査から屋敷地林と暮らしの変化について描いている。屋敷地林の植生の時間的変化に加えて、都市近郊化の影響、新規の屋敷地の造成、屋敷地の利用状況、生産物の収穫・利用、居住者の行動といった社会経済的变化を明らかにした。最終章（第 10 章）では、屋敷地利用の成り立ちから、植物の多様性、持続される屋敷地の価値と自給的性格、変わりゆく屋敷地以外の生産活動と屋敷地利用との関係について検討している。「緑の革命」に代表される近代技術や農村開発についての批判的考察を経て、「バングラデシュ農村の居住空間である屋敷地を舞台とした村の暮らしと、生活の論理に根差した屋敷地林の生産の在りよう」（335 頁）を総括し、その将来とともに私たちの社会のあり方を展望している。

ここからは、本書を読みながら抱いた、屋敷地林をめぐるさらなる興味を読者と共有していきたい。まず、屋敷地林の地域的特徴について。著者は、先行研究から熱帯地域の屋敷地林を概観したうえで、バングラデシュの屋敷地林の特徴を紹介している。たとえば、デルタ地帯での盛り土に仕立てられた点、森林率の低い地域における代替資源とみなされる点、洪水期のシェルター機能をもつ点である。以前からの女性の活動の場に加えて、近年の「在地の技術」「在地の知恵」を学ぶ場と

しても重要になってきたという。

この地域性の理解には、開拓・居住の開始から屋敷地林が文化景観として発達する過程をみると、その後、屋敷地が高度に活用されるようになる社会背景を解明すること、さらに屋敷地利用の地域間比較を行うが有効ではないかと評者は考えている。

たとえば、インドネシア、ジャワ島の屋敷林“プカランガン (pekarangan)”の発生と発展について、高谷〔1985: 173〕は「森が貧弱になって来ると、プカランガンは森の肩がわりという形で発達して来る」と考えた。「一九世紀後半以降の植民地経済、特に砂糖キビ栽培の深化のなかで住民達がとった、ひとつの自衛手段とみることもできる。この時期には彼らに残された土地はこの屋敷地だけだったのである。」とも述べている〔高谷 1985: 174〕。また、植民地期の経済学者は宅地面積の急増を観察している。「純農業地帯ではこの転換は単に生活空間のためばかりではなく菜園用宅地を手に入れるためにも生じているようであり、水田さえも菜園に転換されている。住居のすぐそばで多種類の農産物が手に入ることの重要性を村人は本能的に悟っている。」〔ブーケ（永易訳）1979: 86〕

このように森林の劣化や周辺の土地利用変化とともに屋敷地林・樹園地が発達・変容するという考え方や実際の観察事例が各地で報告されている。本書で紹介されているように、バングラデシュでは19世紀以降、デルタの森林開拓が進展し、森林率わずか6パーセントとなった近年では、木材をはじめ植物資源の供給源として屋敷地林のもつ役割が大きく評価されている（27頁）。

次に「緑の革命」と屋敷地林との関係について。バングラデシュだけでなく、各地で検証してみたい課題である。本書の最終章のなかで、バングラデシュ農村の営農体系の大きな変容を振り返り、その推進力となった「『緑の革命』に代表される近代技術」に、地域性が欠落している点を著者は指摘する。汎用性のある近代技術を、地域の、さらに屋敷地ごとの固有性、地域に根ざした技術と対照させたときの違和感を挙げている（327-329頁）。

ただし、本書が明らかにしたように、屋敷地外の大きな変化に伴って、屋敷地のなかの営みも部分的に変容してきた。「緑の革命を契機に、反収の増加や現金収入に大きく舵を切った営農体系の変化は、耕地からの収穫物（農業副産物の含む）の多様性を大きく減少させたばかりでなく、屋敷地の利用や女性の労働負荷に対しても大きな影響を与えている。」〔334頁〕

ならば、「緑の革命」が屋敷地林の植物利用や栽培に及ぼした直接的影響だけでなく、村人の暮らしや経済に屋敷地林が果たす役割も変わってきたと考えられよう。屋敷地外の「緑の革命」によって、屋敷地の中でどのような変化が起こったか、各地の事例を辿ってみたい。

そうはいうものの「緑の革命」が広がった水田や畑と比較すると、屋敷地には様々な種類・サイズの植物が植わっており、個々の屋敷地林の特徴・変化を端的に把握することは難しい。著者のように詳しい実態を調べ、のちに定点観測によって変化を詳細に明らかにしていく姿勢が必要だと考える。

屋敷地林の発展や水田との関連性については、Dove〔1990〕によるジャワの屋敷地林に関する書

評論文も参考になる。ホームガーデン（屋敷地林）研究のむずかしさは、その多様性と複雑性にあり、それゆえ中央の権力に搾取されにくくなっているという [Dove 1990: 159]。水田では徴税や増産のための開発普及が行われてきたが、屋敷地については（その重要性はオランダ植民地期から認められていたものの）中央による富の吸い上げが難しく、研究開発、ひいては普及の対象から外れてきたという理解である。

本書では、農村開発の一環から農業普及局による家庭菜園プログラムが試みられたが「野菜の栽培や摂取に関する村人の考え方や行動と合致せず、普及に至らなかった」という（334 頁）。普及局は、屋敷地に対して干渉する前に、著者のようにまず村人に学び、一緒に考える姿勢が求められていたと思う。

この「普及」という課題は、本書のもう一つのキーワード「在地の知」とも密接につながる。「在地」は、「土地とそこに暮らしている人々の関係」であり、「在地の知」は、「在地に直結した知」という安藤和雄氏（京都大・東南ア研）の考えに著者は従う。本書には、屋敷地での暮らしに根付いた具体的な「在地の知」の事例が豊富に記述されている。

「堅調な経済成長が続く中、その波に遅れまいと、バングラデシュの村の人々は急いでいる。人々の生活の必要から培われた多様で豊かな『在地の知』の一端を記した本書は、過去の遺物、郷愁の対象となってしまうのかもしれない。ただの郷愁から免れるためには、今そこで暮らす人たちにとって意味のあるものでなければいけない。」（337 頁）

途上国の農村開発、日本の村おこし・地域活性化においても、在来知、伝統智に関する議論と実践は数多く行われている。特に屋敷地林における在地の知の発見については、地元学における活用法を連想する。屋敷地の有用植物の配置図・分布図をつくる手法は、民族植物学や造園学などでしばしば学術的な記録として用いられる。一方、「地元学」の仕事のなかでは、住民自身によって、ときに外部者との共同作業を通じて、土地の人々の暮らしの知恵や懐かしい記憶をよみがえらせ、自らの持っている「もの」「こと」がいかに豊かであるかを自覚する活動として用いられる [吉本 2008; 結城 2009]。

著者は、本年 4 月から東京農業大学国際食料情報学部教員の教員として、日本だけでなく各国の学生達と学び始めている。本書に盛り込まれたベンガルデルタ農村の暮らしと農業に対する見方・考え方は、決して「過去の遺物、郷愁の対象」にならずに、生き生きと分かりやすく学生たちに伝えられ、さらなる研究によって各地の農家や実践家との交流に活かされることを評者は願っている。

参考文献

- 及川洋征、2013、「吉野馨子著 京都大学東南アジア研究所地域研究叢書 26 屋敷地林と在地の知—バングラデシュ農村の暮らしと女性」『農業と経済』第 79 巻第 8 号、102 頁。
海田能宏（編著）、2003、『バングラデシュ農村開発実践研究』、コモンズ。

高谷好一、1985、『東南アジアの自然と土地利用』、勁草書房。

ブーケ、J.H. (永易浩一訳)、1979、『二重経済論—インドネシアにおける経済構造分析』、鹿砦社
(発売)、秋堇書房。

結城登美雄、2009、『地元学からの出発』、農山漁村文化協会。

吉本哲郎、2008、『地元学をはじめよう』、岩波書店。

Dove, Michael R., 1990, "Socio political aspects of home gardens in Java," *Journal of Southeast Asian Studies*, 21 1, pp. 155 163.
